

# スィック教創始者グル・ナーナクの肖像画

## —その形成過程と史的展開—

平成 22 年入学

参加したフィールドスクール：改革フィールドスクール

調査地（調査国）：インド共和国

パキスタン・イスラム共和国

キーワード：スィック教、グル・ナーナク、パンジャープ、美術史、文化人類学

### 自分の研究テーマについて

最も大きな収穫は、ナーナクを単独の主題として描いた最古の遺例である《銘文のローブを纏うグル・ナーナク》の原物を、インド・パンジャープ州の州都チャンディーガルにある国営博物館兼美術館で調査できたことである。調査の結果、この作例の誕生には西洋の鑑賞方法の影響が大きいことがわかった。しかし、パキスタン・ラホールのファキール・ハーナ博物館で報告者が撮影した絵画には、《銘文のローブを纏うグル・ナーナク》以前にナーナクが単独の主題として意識されつつある様子が窺われる。ナーナクの礼拝画の誕生には西洋の影響が大きいという点は事実であるにしても、19 世紀の時点でインド側にも内発的な発展が起きていたと言えよう。

次に挙げるべき成果は、現在最も流通している印刷物の原型であるソバ・シン作《祝福するグル・ナーナク》に関するものである。報告者はインド・アムリトサルにある出版社ゾーン・シン・アーティストで高精細画像を購入できた。そしてグル・ナーナク・デーヴ大学図書館で、ソバ・シンの画業について論じた博士論文 Surjit Kaur, 1990. *Sobha Singh* の存在を確認した。ここに掲載されている図版は報告者の研究テーマを遂行する上で不可欠であると考えられるが、撮影・複写は公式には許可されておらず、今回の調査における最重要課題となるであろう。

### フィールドスクールから得られた知見について

フィールドスクールでは、北タイの NGO・LINK が支援するホアファイ郡での森林保全運動が印象に残った。北タイでは良質のチーク材が産出するため、19 世紀半ばから商業目的で伐採が行われていた。次第にファーン河の下流域で洪水が起こるなどの環境問題が取り沙汰されるようになり、1989 年に商業伐採が全面的に禁止された。しかし、1989 年以後も違法伐採が後を絶たず、状況は改善されなかった。森林資源の枯渇によって、村人たちも被害を受けていたにもかかわらず、環境破壊の当事者であるとの批判を受けていた。自らも商業伐採に少なからず関わっていた村人たちは、長い論争の末に全員で違法伐採から手を引く決断をする。彼らの活動は Link の助けによって、コミュニティー林法の成立に向けて動き出し、現在は最高裁まで争っているそうである。

かつての村人たちは、それぞれの民族ごとに分かれて集落を形成し、仏教・カトリック・プロテスタント・アニミズムなどの異なる宗教を信仰していた。しかし、上述の森林保全活動を通して、村人たちは「ファーン河流域ネットワーク」と呼ばれる団体を設立することができた。そこでは代表者の

挙手による民主的な統治が行われ、学校での環境教育の導入などが実施された。結果として、村人たちは幾つかの拠点が結びついた、中心の存在しない共同体を作り上げ、宗教間の潜在的な対立を乗り越えたと言えよう。彼らを結びつけたのは文化ではなく、土地に基づく帰属意識であった点に留意したい。

### フィールドスクールで学んだ学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

このような北タイにおける成功例は、報告者の研究に対しても有益な示唆を与えるであろう。現在のスィック教の創始者グル・ナーナクの肖像画の原型は、1960年代後半にソバ・シンによって創り上げられた。続く70年代・80年代には、スィック教徒による独立国家カーリスターンの建設運動が高揚し、時流に乗ってナーナクの肖像画信仰は急速に普及していったとみられる。しかし、過激派の活動はついに1986年の治安維持軍による黄金寺院の襲撃（ブルースター作戦）を引き起こし、90年代以降はカーリスターン運動は下火になった。現在ではインド憲法の範囲内で在外コミュニティと連携を深め、平和的に運動が展開されている。この平和的な運動にナーナクの肖像画が大きな貢献をしているのではないかと、報告者には思われる。つまり、スィック教徒たちは公共圏においては民主主義の範囲内で州自治を要求するに留める一方で、ナーナクの肖像画を介して親密圏においてカーリスターンを実現しようとしているのではないだろうか。このような観点を今後の研究に活かしていきたい。



図 1:《ガネーシャとともにいるグル・ナーナク》、イマーム・バクシュ工房、19世紀中頃、ラホール



図 2:《銘文のローブを羽織るグル・ナーナク》、イマーム・バクシュ工房、19世紀後半、ラホール

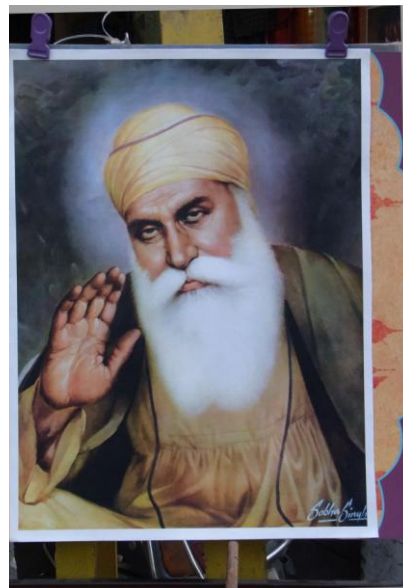


図 3:《祝福するグル・ナーナク》、ソバ・シン作、1968年、アムリトサル